

小中連携を通じた私の授業観の変容

—附属松本学校園での英語授業観の交流を視点に—

荻原大輔 高度教職開発コース

キーワード：小中連携，Can-Do リスト，英語授業観

1. はじめに

小学校に「外国語活動」が導入されてから今年度で9年目となる。私は、中学校英語科の授業の中で生徒の英語の力や英語への態度の変化を肌で感じている。アルファベットの習得や簡単な英語でのやりとりは反応するように答えることができる生徒が多い。このような生徒の変化への対応や小学校での学びを生かす目的のため、小中連携に取り組むようになってきた。私自身も以前から同じ中学校区の小学校を訪ね、英語の授業を見させていただいた。しかし、教科における小中の学校種間の接続は未だ十分ではなく、進学した後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができていない状況があるように感じる。加えて、小学校・中学校を通じて育成を目指す資質・能力について、「読むこと」「聞くこと」「話すこと[やりとり・発表]」「書くこと」の領域別の目標を含む9ヶ年の一貫した学習到達目標については十分に考えられていない現状もある。

また、中央教育審議会答申において、中学校や高等学校では、文法・語彙等の知識がどれだけ身についたかという点に重点が置かれがちであり、外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取り組みには課題があると指摘されている。私自身も授業を振り返ると、ゲーム性やテンポを重視した活動をいかに多く引き出しとして持っているかが、英語教師としての力量だと考え、生徒を飽きさせないように活動を多く用意し、それらの活動を通して表現や単語をいかに多く、正確に覚えることができるかが、教師自身ももっていた英語授業観であった。しかし、附属松本学校園で出会う児童生徒の英語学習における姿は私に驚きを与え、そのような私自身の授業観を再考する契機となった。

そこで、本研究の目的は、信州大学教育学部附属松本学校園における英語科の取り組みを事例に、小中連携を構築するその過程や必要な要件と、この実践を通して私自身の英語授業観の転換や授業改善の具体を明らかにしていくこととした。

2. 実践事例

2.1 小中9ヶ年の一貫した学習到達目標（Can-Do リスト）の作成 【2018-12 実施】

児童生徒の英語の学びを小中9年間で捉えることから連携はスタートした。小学校教員と中学校教員が互いの Can-Do リストを提示し、そこに込められている思いや作成の背景を語るどころから作成が始まったが、その過程がスムーズに進んだわけではない。「小学校は中学校の下請けではない」「中学校は卒業する時にこういう力が付いている生徒になってもら

いたい」等、小中それぞれの立場から意見が交わされた。そこには、中学校の、そして小学校の当たり前が通用しない世界と相容れない壁が学校間に存在した。

そのような中、その壁を乗り越えるきっかけがあった。それは Can-Do リストをどう捉えるかという認識の仕方を小中がともに改めたことにある。私は Can-Do リストを「ここまでできた・できなかった」というように児童生徒の英語の力を把握する指標としてそれまで捉えていた。この捉え方自体は Can-Do リストの役割の視点から見ると当然の機能である。一方で、この視点でしか児童生徒の学びを捉えられないことに、小中での相容れない世界の理由があったと考えている。「到達したからよし」「到達していないから問題あり」という捉え方ではなく、「ここまでできた」「これからこうなりたい」というように、児童生徒自身にとって自分の学びを自覚化する道具でもあるという視点で、Can-Do リストを私たちは捉えるようになってきた。さらに、私たちは児童生徒一人一人の力を掴んだ上で、指導内容の改善や指導計画の練り直しに Can-Do リストを活用していこうとしている。そして、現状の児童生徒の姿から、Can-Do リストの妥当性や願う児童生徒像に対して各段階でのどのような姿や能力が必要であるか、再考し続けるサイクルをもつことができつつある。これが小中連携を構築する一つのキーワードになると考えている。この Can-Do リストを児童生徒と共有し、パフォーマンステスト等と関係付けながら実践を重ねていくことが次の課題となっている。

2.2 英語授業観・英語学習における児童生徒観の変容とその共有

小中連携を考える上で2つ目のキーワードは、英語授業観と英語学習における児童生徒観である。私は「十分な練習をしてから言語活動を行う」「多種の練習をしたから表現が身に付いただろう」等、今まで練習方法の種類豊富さと十分な練習量を確保することに授業作りの重点を置いて授業を行ってきた。しかし、練習したはずなのに、実際に相手に会うと言葉が出てこない、表現や単語をよく知っているが自分の思いを言葉にできないというような生徒の姿に出会うことがあった。その度に「練習不足だ、もっとやらないと」と私は振り返ってきた。しかし同時に本学校園で、児童生徒が自らの思いや考えをどうしても伝えたいのだと必死に言葉を紡ぎながら相手に話をする児童生徒の姿を目にしてきた。この姿から自分自身の実践に疑問が浮かび始めた。私自身、本当に心から出た思いが言葉となり、相手に伝わった時の感動こそが、教科の本質だと考えている。その原点に戻った時、練習を多く積むことと同時に、本当に語りたい、相手の考えを聞き取りたいという経験こそが、言語として自分自身に刻まれ、相手とコミュニケーションする喜びにつながっていくのだと感じた。こういう思いを小学校の先生方と共有する中で「こんなことできっこない」「できてから使う」から、「最初は不十分はあたり前」「できるわけがないからの脱却」が私たちの合言葉となった。

小中両方の授業で、児童生徒自身が自分の思いのこもった内容を伝え合う言語活動と練習・指導場面を、単元を通して何度も位置付けることで、英語によるコミュニケーションの楽しさを実感したり、自ら表現等を求めて主体的に学びに向かっていったりする姿を見ることができた。またこのような英語授業観・児童生徒観を基に小中を通して連続して授業実践を重ねていくことが、英語の知識・技能や思考力・判断力・表現力の高まりとともに、異文化理解を含む国際指向性の高まりや、自らの学びを自覚化し、自分の生き方・あり方を見つ

める姿につながっていると考える。学習内容や指導法等だけでなく、小中両方の教員が英語授業観や児童生徒観を共有することが小中連携を考える時の鍵となっていると言えるだろう。

(1) 小学校の先生の授業変容と対話

小中接続を考える上で、小学校の先生方と話をすることが何度もあった。特に多くの話をさせていただいたのが K 先生である。連携当初、K 先生の実践や授業観は、中学校の英語教師の私自身とまさに同じであった。何を覚えるか、どの表現が身に付いてほしいかが授業作りの土台にあり、本時・本単元で身に付けてほしい表現や単語を、単元構想や学習活動を考える第一優先の視点としてもっていたのである。

その後、互いに授業参観、会話を重ねる中で、K 先生が「セリフを読む授業から抜け出せない」と語り、「やりとり」とは何だろう?と答えを模索する姿があった。ある時、K 先生から、教師が用意した“台本”ではなく、児童同士、ALT と児童の間で自然に生まれるやりとりを大切にしたいという思いが語られた。私自身も K 先生とのやりとりを通じて、生徒が何を思考し、相手の立場や状況に応じて、心から出た本当に伝えたいことを英語にのせて語る姿に出会いたいと願うようになってきた。以下は、授業後の K 先生の振り返りである。

「子どもが自分の伝えたいことだから意味がある。We have Matsumoto castle.の Repeat after me.ではそこに子どもの本物はない。でも、それが We have *Kamikochi*. We can enjoy nature.と伝えた H さんは、おそらく家族で上高地にいったときに鳥がいて、魚がいて、多くの自然があふれていたその文脈に思いを寄せながら語っていくから自分のものになっていく。この附属小で子どもの思い・願いを大切にしている意味はそこにあるのかなと感じる」

この振り返りからも K 先生の授業に対する質的な変容が読み取れる。K 先生と児童生徒の姿を語り合うことを通して、私の英語授業観が影響を受け、互いの英語授業観を近づけ、校種は違えども、共に同じ観を共有しながら授業実践を行う感覚を得たりすることができた。

(2) 新たな授業観を基にした実践 ～「本物」と出会う・かかわる～ 【2019-5 実施】

本学校園の授業作りの根底に流れるのは、生徒自身が自分事として学習題材に向き合い、「こうしたい」と願いや思いをもって探究する授業観である。これを基にした英語科の実践は、文脈や状況を現実にある「本物」に可能な限り近づけて学びを構想することを大切にしている。留学生や外国人等、実在する相手と直接向き合い、自分が伝えたいことを言葉にしていく経験を繰り返していくことが、言語習得を促すとともに、学習者としての自分のあり方や世界に生きる一人の人としての生き方をみつめる機会になり得ると考えている。

I 君は留学生に松本の魅力、特にいつも自分が登下校中に目にする桜の美しさについて伝えたいと考えていた。留学生を松本城の月見櫓に案内し、そこで I 君は「There are cherry trees around it. We can see cherry blossoms in spring. But they don't see now. Because we can see it very short time. They are very beautiful.」とそこから見える城内の桜について、自分の見てきた情景が伝わるように説明をした。そして、学校へ戻る帰り道、留学生から「Do you have a dream?」と尋ねられた I 君は「I want to... I want to help, help 困っている people. I help people. For example volunteer.」と自分の夢を語る姿があった。相手に思いを寄せて考えを伝えたり、相手の考えを理解しようと聞き取ったりする学習を積み重ね、互

いのことを理解し合いたいと願うからこそ、自分が伝えたいことを今ある知識や技能を総動員して、表現していく生徒の姿につながったと考えている。小学校で自分の思いや考えを英語で表現し、相手に伝わる喜びを体感してきた H さんの姿と、相手の立場・状況を考えて自分ならばこのことを伝えたいと願いをもって留学生と関わる I くん の姿には、小中の授業観の繋がりと小中連携を通して願う児童生徒の学びの姿の連続を感じることができた。

3. 結果と考察

3.1 Can-Do リスト作りから始まる小中連携

本学校園で小中を貫く Can-Do リストを作り、児童生徒の英語の能力をみる共通の目をもてたことで、9年間という時間軸の中で児童生徒の姿を捉えることができるようになった。またその指標を、授業作りや評価を考える議論のスタート地点として位置付けることができてきた。中学校での姿を想像しながら、小学校での姿を思い出しながら、小中の英語教員が同じ土台の上で、議論と実践を重ねることができている。そして Can-Do リストを作る過程での小中教員同士のやりとりが連携を考える上で重要な示唆を含んでいたことに気付いた。

3.2 授業観の更新と小中連携の深まり

Can-Do リストを作る議論を始めた時、私には英単語や文法事項をいかに工夫して指導していくのかという意識が議論の前提にあったように思う。私は授業作りでは生徒の思いを大切にしてきたつもりだったが、連携となるとその見方が端に置かれて議論していることに気が付かなかった。しかし、「こうなりたい」「こうしたい」という児童の思いを大切にするという視点を一貫して語る小学校の先生の姿から、私は実践と主張の矛盾をはらんでいる自分自身に気付かせてもらった。そして実際に生徒が自分の思いを語り、英語を用いながら相手とコミュニケーションすることに喜びやさらに深く学びたいと願う姿に授業の中で出会っていくことで、私の授業観の転換が起きてきた。新たな授業観の魅力や重要性が理解できてもそれを実践に落とし込んでいく難しさもあり、さらなる努力が必要だが、小学校の先生方と共に連携を考えることが、私の授業を大きく変えるきっかけになったことは間違いない。

児童生徒が相手の立場や状況を考えながら、自分がこれを伝えたいという思いをもてるような授業をしたいと小中の教員が共に願い、実践を重ね、その学びの良さを感じ合うことが松本学校園で出来始めている。また共通の授業観をもちながら互いの授業を見ることも出来始めたことで、研究会での議論の深まりやこれからの連携の姿を考える機会も増えてきた。

研究開発指定校として英語科における小中連携の議論が始まり、システムとしての小中連携のモデル作りがスタートであったが、議論を続ける中で、小中教員の児童生徒を見る目や英語授業観という内実的な繋がりを更新していく事象が多く現れてきた。別の言い方をすれば、Can-Do リストという枠組みを構想していく過程があったからこそ、このような授業観の変容が現れてきたとも言える。小中連携をもとにした児童生徒の英語の学びの接続について、小中の教員が共に向き合うことをきっかけに、英語授業観の変容とそれに伴う授業改善がなされてきた。小中連携をきっかけに、学校園としての研究開発という課題と私の英語教師としての質的な変容が、互いにすり寄ってくる感覚を今、得ることができている。